

論 文

スペイン語の ‘No-*Porque*’ 文に関するコーパス調査
 ～動詞の「法 (Mood)」の選択と作用域解釈の関係を中心に～

小 泉 有紀子

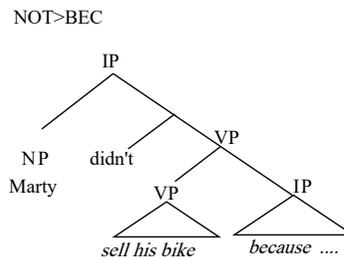
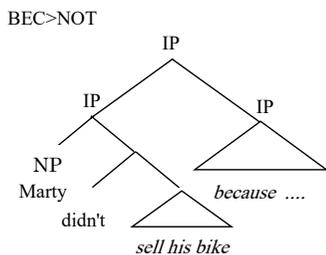
I. はじめに

人間の言語産出と理解, 特に文構造の解析メカニズムを解明するためには, 多義構造 (2つ以上の統語構造が考えられるような句や文) の処理がどのようにされているかを見るのが有益な方法の一つである。2つの可能な構造 (解釈) から一つを選び取る際に私たちはどのような方略を用いるのか, そしてその方略はどの言語にも普遍的なのか, それとも言語によって違いがあるのか。この問いの答えに近づくため本稿では下記のような作用域多義構造を見る。

(1) Jane didn't leave because she was angry.

(1)の英文 (*not-because* 文) は2つの可能な解釈を持つ。一つは「Jane は立ち去らなかった, その理由は怒っていたから」という読みとなる。ここでは, 否定の作用域よりも *because* 節の作用域の方が大きい構造を持つ (BEC>NOT 読みまたは解釈と呼ぶ)。もう一つは「Jane は立ち去ったのだったがその理由は怒りによるものではない」という理由の否定であり, 否定の作用域が *because* 節を含む (NOT>BEC 読みまたは解釈と呼ぶ)。Johnston (1994)の統語分析を採用すると, この2つの違いは *because* 節が統語上文全体 (IP) に付加されるか, 動詞句のみ (VP) に付加されるかという構造上の違いとなる。これを簡略に表した樹形図は下記の通りである。

(2) Marty didn't sell his bike because the gears were broken.



(Johnston 1994: 151を簡略化)

この構文の処理に関して、英語を対象とした文処理実験 (Frazier and Clifton, 1996) の結果から、BEC>NOT (because 節が IP に付加される解釈) の方が好まれる (もしくは、NOT>BEC または VP 付加解釈は難しく、好まれない) ということが示唆された。これは、新しく現れた要素をより構造上近い方に付加することが好まれるという一般言語解析原理 (例: Late Closure の原理) の傾向に反しているように見える。なぜそうなるのかの説明として、Koizumi (2009) が行った自己ペース読み実験の結果から、英語文処理においては語用論 (文脈) 的要因や韻律的要因などの非統語的要因が大きな役割を果たすことが示唆された。

ではこの説明は、どの言語にも普遍的に当てはまるのか、それとも言語ごとに異なるのだろうか。本研究ではこの言語間比較の視点から、スペイン語の *not-because* にあたる *no-porque* 構文を取り上げる。なぜスペイン語を取り上げるかの理由は2つある。1つは、スペイン語では関係代名詞節の付加に関する多義構造の研究で、英語と異なる付加選好が見られることが報告されていることである。

(3) Someone shot _{NP1}the servant of _{NP2}the actress who was on the balcony.

(3)において、関係代名詞 *who was on the balcony* が付加する位置として可能な2つの名詞句 (NP1, NP2) のうち、英語では NP2 *the actress* が好まれ、一般言語解析原理 (例: Late Closure) に合致するのに対し、スペイン語では NP1 *the servant* が好まれることが報告された (例: Cuertos and Mitchell, 1980)。以後、この構文についてさまざまな言語での実験が行われ、一般言語解析原理以外の要因 (例: 意味論的要因、韻律的要因など) の役割や言語間での差異についての研究が行われてきた。このような複雑名詞句の解釈において英語と異なる選好傾向を見せる代表例とも言えるスペイン語と英語を比較することは、他の構文でも言語多様性が見られるのかどうかを検討するために重要である。

もう1つの理由は、スペイン語では英語と異なり、解釈と動詞の「法 (Mood)」に対応が見られると考えられることである。つまり、どちらの作用域解釈なのかに応じて、*porque* 節の動詞の法 (Mood) が変化するという母語話者の直感があることである。下記の(4)-(5)のスペイン語文からわかるように、英語で言う BEC>NOT にあたる PORQ>NO の読み (ブラウスを買わなかった) の場合は *porque* 節の動詞は直説法 (indicative, IND) であるのに対し、英語の NOT>BEC にあたる NO>PORQ 読み (ブラウスは別の理由で買った) の場合は、*porque* 節の動詞は接続法 (subjunctive, SUBJ) となるというのだ。

(4) [PORQ>NO]

Julia no compró la blusa porque es de seda.

Julia NEG buy-PAST the blouse because is-IND of silk

(5) [NO>PORQ]

Julia no compró la blusa porque estuviera de seda.

Julia NEG buy-PAST the blouse because is-SUBJ of silk

ただしこの直感はスペイン語母語話者の中でも意見が分かれており NO>PORQ 読みの時でも直説法が使われるケースも考えられる¹という。スペイン語でこの複雑な構文がどのぐらい使われているかの全体像も知る必要があるため、コーパス調査を通じて、スペイン語においてはこの *no-porque* 構文は実際のどのぐらい使用されていてその解釈はどのように分布しているか、また解釈と *porque* 節内の接続法の使用がどのぐらいあるかをまず明らかにする必要がある。

以上のことから本研究では下の2つのリサーチ・クエスチョンに答えを出すことを目的としてコーパス調査を行う。

RQ1: スペイン語の *no-porque* 構文の実際の例において、PORQ>NO 解釈と NO>PORQ 解釈の分布はどのようにになっているか？

RQ2: *Porque* 節内の動詞の形について、PORQ>NO 解釈には直説法が、NO>PORQ 解釈には接続法が呼応しているか？していないとすればどのような例があるか？

本論文の構成は以下のとおりである。次のセクションでは、英語におけるこの構文に関する先行研究と、スペイン語 *no-porque* 文と動詞の「法 (Mood)」の関連についての研究やこれまでに行われたスペイン語産出研究についてまとめる。次に、今回行ったスペイン語のコーパス調査の詳細と結果を報告する。最後に、結果を踏まえた考察を行い、今後への示唆を述べる。

II. 先行研究

2.1 英語 *not-because* 構文に関する理論・文処理研究

2.1.1 英語 *not-because* 構文の文脈・韻律的特性

英語の *not-because* 構文の2つの可能な解釈とそれに付随する文脈やイントネーションの違いについては理論言語学研究でも扱われてきた (Jackendoff 1972, Linebarger 1988, Johnston 1994 など)。たとえば Jackendoff (1972) では2つの解釈と2つのイントネーションの違いが指摘され、主に文末の上昇調・下降調の違いが意味解釈に影響を与える例として取り上げられている。Ladd (1980) はこのようなイントネーション特性の違いがあることを指摘しながらも、それらのイント

1 例えばラテンアメリカで話されているスペイン語や、スペインの中でもバスク語やカタラン語とのバイリンガルの話すスペイン語と、カスティーリャ地方のスペイン語では接続法の使い方が異なるとの母語話者の意見もあった。

ネーションが受け入れられるためには適切な意味的文脈もなければならぬとしている。

実際にこの「イントネーション特性」の違いがどのようなものなのかを報告したのが Hirschberg and Avesani (2000) である。この研究では、下記の文を、2つの異なる文脈の中に提示し、どちらかの解釈にしなければならないようにして被験者に音読させたものを録音し韻律特性を分析した。

(6) William isn't drinking because he is unhappy. (Hirschberg and Avesani 2000: 88)

(6) のようなターゲット文の前に 4 つの文、後に 1 つの文をつけることで 2 つの文脈 (BEC>NOT: ウィリアムは不幸を感じているのでお酒を飲んでいない vs. NOT>BEC: ウィリアムは不幸だから飲んでいるのではなくアルコール依存症なだけだ) を提示した。被験者 6 名はそのパッセージ全体をまず黙読して意味を確認してから音読し、それを録音したものを Tone and Break Indices (ToBI, cf. Beckman and Elam 1997, Silverman et al. 1992) を用いて記述したところ、以下ようになった。(BEC>NOT, NOT>BEC の表示は著者が追加した。)

(7) [BEC>NOT]

William isn't drinking because he's unhappy
 H* !H* L-H% H* L-L%

(8) [NOT>BEC]

William isn't drinking because he's unhappy
 H* !H* H* L-H%

(Hirschberg and Avesani 2000: 90)

(7) と (8) の違いは大きく 2 つある。一つは Jackendoff (1972) も指摘した文末イントネーション特性である。BEC>NOT 読み (7) では通常の下昇イントネーションであるが、NOT>BEC 読み (8) の産出は 18 例中 10 例で文末イントネーションの上昇が見られた (L-H% もしくは Jackendoff のいう continuation rise)。2 つ目は、BEC>NOT 読み (7) で節 1 (主節) の後に韻律境界 (L-H%) が典型的に観察されたことである。この結果から、適切な文脈を与えた時にこの構文の実際の発話は韻律的に異なる特性を持つということが示された。また、特に 2 つ目の韻律境界の有無の違いは、それまでの研究では指摘されてこなかったことである。

2.1.2 文処理実験

この構文の処理に関して行われた英語文処理実験として最も早いものは Frazier and Clifton (1996) である。下記のような文を 1 語ずつスクリーンに提示し、理解できたらボタンを押した上で、理解確認質問に答えるものであった。

(9) [BEC>NOT]

The secretary didn't quit because of her large raise.

(10) [NOT>BEC]

The secretary didn't quit because of her low salary. (Frazier and Clifton 1996: 56)

この実験の結果は、NOT>BEC 解釈にバイアスをかけた文の理解できた割合が低く、反応時間も長くかかり、理解確認質問の成績も低かったというものだった。これは、BEC>NOT (*because* 節が IP に付加される解釈)の方が好まれる (もしくは、NOT>BEC または VP 付加解釈は難しく、好まれない) ということを示唆する。一般言語解析原理の傾向が当てはまるなら、新しく現れた要素をより構造上近い方に付加する NOT>BEC が好まれるはずなのに、その逆になったと言うことである。なぜこのような結果になったのか。Frazier and Clifton (1996) では、*not-because* 文の *because* 節や関係代名詞節のような付加詞 (Adjunct) が解釈される際には一般統語解析原理だけではなく非統語的要因も関わる可能性があるという説明がされ、特に *not-because* 文で一般統語解析原理に反するような結果が出たことについては、文の途中までで行っていた解釈 (例: 秘書は退職しなかった) を訂正し意味を反転させるのは最小限にしたい (Minimal Revisions 最小訂正の原理) という傾向があるのではという考えに言及したが、その仮説を検証するには至らなかった。

Koizumi (2009) はこの結果を受けて、*not-because* 構文の NOT>BEC 読みの難しさは、NOT>BEC の持つ文脈的、韻律的な (非統語的) 特性に関係があるのではないかという仮説を立て、この2つの要因を検証する自己ペース読み実験を行った。下は実験に使われた文ペアの1つである。

(11) [BEC>NOT]

Sarah didn't cry because she was in public.

(12) [NOT>BEC]

Sarah didn't cry because she felt lonely.

Because 節の内容を、BEC>NOT か NOT>BEC どちらかにしか読めないようにバイアスをかける (解釈要因) とともに、もう一つの要因として「節タイプ」の要因を取り入れた。ターゲット構文をそのまま提示した場合 (主節条件) と、If 節の中に埋め込んで提示した場合 (If 節条件) での自己ペース読み時間の傾向が変わるかを検証した。

(13) [BEC>NOT, If 節条件]

If Sarah didn't cry because she was in public,

(14) [NOT>BEC, If 節条件]

If Sarah didn't cry because she felt lonely,

母語話者の直感では、If 節に埋め込むことによって、2つの点が変わる。1つは、If 節に埋め込まれることによって、文の韻律が変わり、BEC>NOT の文であっても *because* の前の韻律境界が小さくなり、節の最後の下降調がなくなる（上昇調もしくは平坦）と考えられるため、Hirschberg and Avesani (2000)で報告されていて NOT>BEC に典型的な韻律に近くなると考えられる。2つ目には、If 節の意味的な特性により、ターゲット文で述べられている命題の真偽が文の最後まで留保される（サラが泣いたかどうかは、If 節の中身だけからはまだわからない）ことから、BEC>NOT でも NOT>BEC でも、文脈的な自然さは差がなくなるのではないかと考えられる。この直感が正しいかどうかを検証するために、また Frazier and Clifton (1996)がおこなっていたような単語一つ一つの提示ではなく、フレームごと提示したターゲットの読み時間を測定する実験を行い、節・文レベルの韻律の効果を検証した。(15)に、2要因ずつを掛け合わせた4バージョンを提示する。実験は4リストあり、1人の被験者はこのうちどれか1つのバージョンしか目にしなかった。下記の例は、左側の答えが正答となる（実際は、答えの左右は半数ずつ提示している）。

(15) [BEC>NOT, 主節条件]

Sarah didn't cry because she was in public. [Frame 1]

Did she do so later on? [Frame 2]

She was tearful when she got home. She was fearful for many months. [Frame 3]

(16) [NOT>BEC, 主節条件]

Sarah didn't cry because she felt lonely. [Frame 1]

What else was the matter? [Frame 2]

She was much too upset to explain. She is a very intelligent person. [Frame 3]

(17) [BEC>NOT, If 節条件]

If Sarah didn't cry because she was in public, [Frame 1]

did she do so later on? [Frame 2]

She was tearful when she got home. She was fearful for many months. [Frame 3]

(18) [NOT>BEC, If 節条件]

If Sarah didn't cry because she felt lonely, [Frame 1]

what else was the matter? [Frame 2]

She was much too upset to explain. She is a very intelligent person. [Frame 3]

このような3フレームからなる会話を作成し、1フレーム目にターゲット文、2フレーム目にそれに続く質問（意図された読みができていないかを確認する役割も果たす）、3フレーム目には質問への答えを2択で提示した。

24個の *not-because* ターゲット、24個の PP 付加構文、48の純粹フィラーの合計96アイテムを、64人の英語母語話者が自己ペースでボタンを押しながら黙読し、読むのにかかった時間を測定した。その結果得られた *not-because* 文の読み時間は下記の通りである。

表1. *Not-because* 文フレーム1の解釈と節タイプごとの読み時間平均（ミリ秒，N=64）

解釈	節タイプ	
	主節条件	If 節条件
BEC>NOT	3559	4040
NOT>BEC	4081	4155

主節条件の時には Frazier and Clifton (1996) を再現する形で BEC>NOT の方が速く読まれたのに対し、If 節条件ではどちらの解釈でも読み時間に有意な差がなかった。解釈と節タイプの交互作用が観察された ($F(1,60)=16.76, p<.001, F(2,120)=9.03, p<.01$)。この結果から、この *not-because* 構文の処理において NOT>BEC 解釈が難しいのは、文脈や韻律などの非統語的要因によるものであることが示唆された。

Koizumi (2009) はさらに、この実験のフレーム1に改行を加えたものを用いて同じ内容の自己ペース読み実験を行ったところ、観察されていた交互作用は消滅し、節のタイプに関わらず BEC>NOT 読みが早く読まれる結果となった。この「改行」は、*because* の直線に韻律境界を誘導するものであると考えられることから、文脈的要因よりも韻律的要因の方が大きな役割を果たすのではないかという結論となった²。

ここまで、英語母語話者を対象とした *not-because* 構文の処理についての先行研究を概観した。この構文の処理においては非統語的要因～文脈や韻律～が重要な役割を果たしているらしいことが示されたが、スペイン語の同等の構文ではどうだろうか。また、英語にはないスペイン語の「法」との関連という興味深い特性を含めて次のセクションで扱う。

2.2 スペイン語の *no-porque* 構文

2.2.1 動詞の「法」と解釈の関係

スペイン語における *not-because* に相当する構文として *porque* (*because*) を用いたものを扱う

2 ここでは黙読実験においても韻律の役割を大きく扱っているが、これは Fodor (2002) の非明示的韻律仮説に基づいて、黙読であっても頭の中には文の韻律特性が投射され、解釈に影響を与えているからである。Koizumi (2009) やその後の実験で、実際の読み上げによる産出実験においても、韻律特性がここで仮定した通りの傾向を見せたことが確認されている。

(*no-porque* 構文と呼ぶ)。この構文を特に取り上げた文献は多くはないが、2つの可能な解釈があることは例えば田林 (2007) に指摘がある。

(19) El no sé movió porque fue empujado.

He NEG move-PAST because was pushed

(He didn't move because he was pushed)

(20) a. CAUSE (él fue empujado, NOT (él sé movio))

b. NOT CAUSE (él fue empujado, él sé movio)

(田林 2007: 51³)

(19)の文に可能な2つの作用域関係は、1つは(20a)に示された「彼は押されたから動かなかった」という、本稿でいうPORQ>NO読み(田林の表現を借りると『CAUSEがNOTの作用域外にある読み』)であり、もう1つは(20b)の「彼が動いたのは、押されたからではない(他の理由である)」という、本稿でいうNO>PORQ読み(田林の表現では『CAUSEがNOTの焦点になっている読み』)である。

さらに指摘された興味深い点として、スペイン語においては*porque*節の中の動詞の「法」が重要な役割を果たすという観察がある。田林は脚注において、(19)に見られるように*porque*節の動詞が直説法(indicative IND, ここでは*fue*)であれば多義構造((20a)と(20b)の解釈のどちらも可能)となるが、接続法(subjunctive SUBJ, ここでは*fuera*)になる場合は否定が*porque*節より大きい作用域となるNO>PORQ読み(20b)しかなくなるとコメントしている⁴。

喜多田・シフエンテス(2018)は様々な否定文についてのスペイン語母語話者の直感を報告する中で、否定の作用域は「接続法などの日本語にはない形式を用いることでより明確に表示可能である」ことの例として下記のことを挙げている。

(21) No te lo dije porque quisiera ofenderte.

NEG you it say-PAST because want-SUBJ offend-you

(I did not say it to you because I wanted to offend you)

(喜多田・シフエンテス2018: 99)

(21)で使用されている接続法*quisiera*は、理由節が否定の作用域に含まれていることを示す役

3 田林(2007)の作用域関係の提示順は本稿と逆であったが、混乱を避けるためここでは入れ替えた。

4 スペイン語において接続法が用いられる時の意味分析に関する研究は多くあり(Terrell and Hooper 1974, Farkas 1992, Portner 1997, ほか)、接続法が用いられる時のパターンはいくつかに分類されているが、この構文を特に取り上げて論じた研究は見つかっていない。NO>PORQ解釈の時に接続法が使われるケースは、従属節に現れる接続法で、特に否定の作用域に含まれるタイプのもと考えられ、その理由はNO>PORQ解釈の場合*porque*節内の命題の真偽が保証されないからではないかと思われる。

割を果たしており、このようにスペイン語では従属節（理由節）で接続法をとることにより、そこまで否定の作用域が及んでいる（本稿でいう NO>PORQ 読みとなる）ことを「明確に表現することができる」と喜多田・シフエンテスは指摘しており、これは田林（2007）の記述と合っている。しかし、(22)のように *porque* 節の中で直説法 *quería* を使う場合には、両方の解釈が可能であるという田林（2007）の指摘とは異なり「理由節が否定の作用域から外れてしまう」ために「私はあなたを怒らせたかったのですがそのように言わなかった（＝黙っていた）」という解釈（本稿でいう PORQ>NO 読み）になると報告している。

(22) No te lo dije porque quería ofenderte.

NEG you it say-PAST because want-IND offend-you

(I did not say it to you because I wanted to offend you)

このように、作用域解釈についての観察にも違いがあることがわかる。

スペイン語母語話者である研究協力者からの指摘で、この多義構造の処理においては PORQ>NO 解釈が優勢でありそうなことには間違いはないが、*porque* 節の動詞の「法」の選択には地域差（例：ヨーロッパのスペイン語とラテンアメリカ各国のスペイン語での違い）があることが予想されること、特に接続法は時代の変遷とともにあまり使われなくなっている地域もあるのではないかという意見があった。*no-porque* 構文において *porque* 節の動詞の法の選択によって解釈が分かれるという現象が実際の言語使用においてどのくらい表れているのかを検証する必要性がある。*no-porque* 構文はどのくらい使われていて、その解釈はどのように分布しているのだろうか。

2.2.2 Koizumi et al. (2019) の文完成課題

Koizumi et al. (2019)ではスペインに在住する69名のスペイン語話者大学生を対象とし、文完成課題を用いて2つの解釈の生起の分布を調査した結果が報告された。12個の *no-porque* 文の前半部分のみを提示し、文を自由に完成してもらおうというタスクであった。以下に例を示す。

(23) Sara no lloró porque...

Sara NEG cry-PAST because...

(Sara didn't cry because...)

(24) El pez de Isabel no se murió porque...

The fish of Isabel NEG die-PAST because...

(Isabel's fish didn't die because...)

無関係な構文のフィラー24を含む36文全てにおいて、従属節の1語目（ここでは *porque*）までを提示し、残り部分を自由に書いて文を完成するタスクであった。合計828の *no-porque* 文の産出を得た中から、スペイン語母語話者が文脈上どちらの解釈と読めるかを判断し分類したところ、解釈が明らかな824例のうち820例（99.5%）が PORQ>NO 解釈の例で、4例（0.5%）が NO>PORQ 解釈であった⁵。

(25) [PORQ>NO] 産出例

a. Sara no lloró porque es fuerte.

(Sarah didn't cry because she is strong)

b. El pez de Isabel no se murió porque tenía suficiente agua en la pecera

(Isabel's fish didn't die because there was enough water in the tank)

(26) [NO>PORQ] 産出例

a. Sara no lloró porque su pez hubiera muerto.

(Sarah didn't cry because her fish died)

b. El pez de Isabel no se murió porque tomara demasiada comida, se ve que el agua estaba contaminada

(Isabel's fish didn't die because it ate too much, it was clear that the water was contaminated)

そして、PORQ>NO 解釈では820全ての例で *porque* 節の動詞に直説法が使われていたのに対し NO>PORQ 解釈のものでは4つ全ての例で接続法が使われており、喜多田・シフエンテスの指摘通り解釈と動詞の法が対応していることがわかった。

しかし、この調査には課題点が2つあった。一つは、NO>PORQ 解釈の例が4例と圧倒的に少なかったことである。これは、(23)-(24)の課題例からもわかるように、文の途中までが PORQ>NO 解釈を示唆するものであるため、文の要素が提示されてすぐに（文の終わりまで待たずに）解釈を始めるという文処理原理（即時解釈原理, Principle of Immediate Interpretation, cf. Frazier and Clifton, 1996）に基づけば、一度得た意味を逆転させる作業を必要とする NO>PORQ 解釈で文を完成させることはより大きな認知コストを伴うからであると考えられる。タスクそのものにこのようなバイアスがあったことが考えられるため、別のやり方で実際の生起例を見る必要があると考えられた。また二つめに、得られた NO>PORQ 例が4例と少なかったため、十分な例が得られたとは言い難い。また、この調査では参加者がスペイン、特にカタルーニャ地方の

5 スペイン語母語話者の判断により4例をどちらの解釈が意図されたか不明として除外した。

スペイン語話者が中心であったため、他の地域で話されるスペイン語話者のデータも見る必要があることも指摘された。

以上の結果を踏まえ、本調査ではスペイン語の自然生起データをコーパスから抽出し分析することで、*no-porque* 構文の実際の使用例を検討し、作用域関係と動詞の法の関連を含めより深く考察していく。

Ⅲ. コーパス調査

3.1 コーパス例の抽出

スペイン王立学術院 (Real Academia Española) のスペイン語コーパス CORPES XXI コーパスを用いて調査した。このコーパスは2001年以降のスペイン語データを集めたもので、約2500万型 (formas⁶) が含まれる。書き言葉 (本, 雑誌, インターネット記事など) が約9割で、話し言葉が1割である。媒体, 国, ジャンル別などで検索できるが、約3割がスペイン王国, 約7割がアメリカ大陸の各国のものである⁷。

このコーパスから *no-porque* 構文の例を抽出するために、否定語 *no* の後に2語または3語の任意の語 (*) が続いたのち *porque* が出現するという検索条件として約3000例を抽出した⁸。

3.2 抽出結果の分析方法

まず、抽出された例のうち、今回の分析対象ではない構文と判定された例などを除外した。除外した例に見られたパターンのいくつかを以下に示す。(スペイン語例とその英文訳を提示する。)

(27) *no* と *porque* がピリオドで句切れられ別の文になって現れている例

La visión podría ser espantosa, pero *no* para Luis. *Porque* todo eso era como él veía a Marketa: misterioso y bello.

(The vision could be frightening, but not for Luis. Because all of that was how he saw Marketa: mysterious and beautiful.)

6 ここでのいう forma とは、語のほかピリオドやコロンなどの句読点、「...」など略型の記号なども含んだものこのことを指しているようである。

7 コーパスからの該当例の抽出とその地域ごと分類は國井修人氏の卒業研究の一環として著者の助言のもと行われた。抽出例のさらなるフィルタリング、動詞の活用形のタグ付けと作用域解釈の集計・分析は國井氏の試行したものを基に許可を得て著者が大幅に再構築・拡張したものである。國井氏並びに母語話者インフォーマントであるラザロ・エチェニケ、アンヘリカ・イーチグ両氏に深く感謝申し上げます。

8 *no* に続いて1語だけのケースも検討したが、該当する構文ではない例が多く抽出されたため、今回は *no* の後に2語または3語が現れて *porque* へ続いていく例を対象とした。

- (28) *no* が *porque* の直前にも現れている例 (別構文とみなす)

Ahí nos pasarían, pero nosotros no entendimos, *no porque* hablaran diferente o porque uno de ellos fuera gringo, sino porque

(They would pass us by there, but we didn't understand, not because they spoke differently or because one of them was a gringo, but because....)

- (29) 否定語 *no* と *porque* に作用域の相互関係が見られない例

Qué bueno que *no* lo dijo, *porque* ella no lo hubiera entendido, al menos no la asociación con ella.

(Good thing he didn't say it, because she wouldn't have understood, at least not the association with her.)

上の例では, *porque* は主節の感嘆文 *Qué bueno que...* を作用域にとっており, 否定と直接関係がないことがわかるため, 除外した。

抽出した1167例から上記のような対象外の例を除外して得られた936例を分析対象とした。抽出された例の前後の文脈ならびに2名の母語話者インフォーマントの判断を経て, 意図されている解釈をタグづけした。また, *porque* 節の動詞の形についても調査した。

3.3. 結果

上記の方法で分析した結果は以下のとおりである。

まず表2に, 抽出された *no-porque* 構文例の国別内訳を示す。

表2. 抽出した *no-porque* 構文 (n=936) の国別内訳

国名	個数	国名	個数
アルゼンチン	103	ホンデュラス	13
ボリビア	12	メキシコ	101
チリ	83	ニカラグア	15
コロンビア	60	パナマ	10
コスタリカ	10	パラグアイ	37
キューバ	27	ペルー	42
エクアドル	1	プエルトリコ	7
エルサルバドル	16	ドミニカ共和国	15
スペイン	267	ウルグアイ	42
アメリカ合衆国	3	ベネズエラ	42
グアテマラ	27	不明	1
赤道ギニア	2		

全936例のうち、スペインで出版された例は267例で、28.5%であった。コーパスの概要説明によればスペインのデータの割合が全体の「約3割」とあるので、no-porque 構文はとりわけヨーロッパのスペイン語で多いわけでも、少ないわけでもなかったようであった。

次に、抽出された例について、前後の文脈をもとに判断した作用域解釈の分布を表3に示す。

表3. 抽出された no-porque 構文 (n=936) の作用域解釈の分布

作用域解釈	個数
PORQ>NO	922 (98.5%)
NO>PORQ	13 (1.4%)
不明	1 (0.0%)
合計	936

全体の99%近くが PORQ>NO 解釈となり、Koizumi et al. (2019)の文完成課題の結果を再現する形となった。つまり、文完成課題のタスクのバイアスにより PORQ>NO 解釈に偏ったわけではなく、実際の例でも PORQ>NO 解釈がほとんどであることがわかった。前後の文脈を吟味し母語話者による判断を経ても解釈がどちらかはっきりしないものは1例であった。

次に、抽出された例の、porque 節の中の動詞の法の分布について、全体数の結果は表4の通りである。

表4. 抽出された no-porque 構文 (n=936) の porque 節内の動詞の法 (Mood)

動詞の法 (Mood)	個数
直説法 (IND)	919 (98.2%)
接続法 (SUBJ)	17 (1.8%)
合計	936

PORQ>NO 構文が多いことから予想されたように、直説法が大部分となった。

次に、動詞の法ごとの結果を見ていく。まず、直説法の例における作用域解釈の分布は表5の通りである。

表5. Porque 節の動詞が直説法である例 (n=919) の作用域解釈の分布

動詞の法 (Mood)	個数
直説法 (IND)	919 (98.2%)
接続法 (SUBJ)	17 (1.8%)
合計	936

これも予想通り、ほぼ全てで PORQ>NO 解釈となった。NO>PORQ 解釈の例は2例のみであった。NO>PORQ 解釈でも直接法の例が見られる可能性も想定していたが、大変少ないという結

果となった。

では、接続法の場合はどうだろうか。表6を見てみよう。

表6. *Porque* 節の動詞が接続法である例 (n=17) の作用域解釈の分布

作用域解釈	個数
PORQ>NO	916 (99.7%)
NO>PORQ	2 (0.2%)
不明	1 (0.1%)
合計	919

表6に見られるように、接続法に対応する NO>PORQ 解釈の方が多という結果にはなつたものの、割合としては3分の2弱にとどまった。接続法が使われているにもかかわらず PORQ>NO 解釈になる例も6例あった。これについては次節で取り上げる。

ここまでの結果の概要として、コーパス調査でも Koizumi et al. (2019) の文完成課題で見られた産出傾向が大きく変わらないことが見てとれた。次節では、抽出された例の中からいくつかを取り上げ、その意味や解釈についてより深く考察する。

IV. 考 察

本節では、さらに詳しく抽出された例を吟味し、*no-porque* 構文の作用域解釈と *porque* 節の動詞の法の関係について検討していく。本節の各抽出例には英訳と日本語訳を括弧書きで示す。

4.1 *Porque* 節動詞が直説法のケース

Porque 節内の動詞が直説法のケースは、作用域解釈 PORQ>NO と呼応している。予測通り、ほぼ全ての例がこのケースであった。たとえば下のような例である。

(30) 直説法, PORQ>NO, 2001, Venezuela, Fiction

Luciano *no* termina su discurso *porque* a un gesto de Maisanta, Negro Aponte lo derriba de un culatazo de fusil.

(Luciano does not finish his speech because at a gesture from Maisanta, Negro Aponte knocks him down with a rifle butt.)

(ルシアノはスピーチを終わらなかったがその理由はネグロアポンテという人物がライフルの台尻で彼を殴って倒したからである)

では、本稿の焦点の1つとなっている、直説法が使われるときに NO>PORQ の解釈がなされる場合もあるのかどうかという点について、次の例を見てみよう。

(31) 直説法, NO>PORQ, 2001, Spain, Fiction

El ojo que ves *no* es ojo *porque* tú lo *veas*; es ojo porque te ve.

(The eye you see is not an eye because you see it; It is an eye because it sees you.)

(あなたが見る眼はあなたがそれを見るから眼であるのではない。それがあなたを見るから眼なのである)

上の(31)は後に続く文脈から明らかに NO>PORQ 解釈が意図されているものであるが、動詞は *ver* (見る) の直説法 *veas* が用いられている。

次の例は少し長いが、こちらでも *porque* 節には *ser* (be) の直説法現在形が使われているが、解釈は NO>PORQ であることが後続の文脈よりわかる。

(32) 直説法, NO>PORQ, 2001 Argentina, Non-Fiction

En lo que se refiere al desfinanciamiento de la salud pública, González explicó que tal vez *no* se dé *porque* los recursos *no son* suficientes sino porque no llegan a quienes deben llegar y de la manera en que deben llegar.

(Regarding the underfunding of public health, González explained that perhaps it does not happen because the resources are not enough but because they do not reach who they should reach and in the way they should reach them)

(公衆衛生の予算不足について、ゴンザレスは、(予算不足は) おそらく財源が十分ではないから起きるのではなく財源が行き渡るべきところに行き渡るべき方法で渡っていないから起きると説明した)

これらの例は、NO>PORQ でも直説法が使われる場合もあるという田林 (2017) の指摘と合っている。しかしながら、このような例が上の2例しかなく、NO>PORQ 例が全部で17であることをみると、典型的ではないと言わざるを得ない。

4.2 *Porque* 節動詞が接続法のケース

Porque 節内の動詞が接続法のケースでは、基本的に作用域解釈 NO>PORQ が現れると予測された。たとえば次のような例が見られた。

(33) 接続法, NO>PORQ 2001, Venezuela, Fiction

No lo hizo porque desconfiara de ti Antonella. Lo hizo porque te ama y ¡no quería causarte este dolor!

(He didn't do it because he distrusted you Antonella. He did it because he loves you and he didn't want to cause you this pain!)

(彼はあなたを不信に思っているからやったんじゃないのよ、アントネラ。あなたを愛していて、この痛みをあなたに感じて欲しくなかったからやったのよ)

後に続く文からわかるように、「彼が何かをした」という事実がありその理由は相手への不信からではないという NO>PORQ 解釈が示されている。

しかし、PORQ>NO 解釈とほぼ完全に対応している直説法の場合と異なり、接続法のケースで NO>PORQ 解釈となったのは全体の3分の2弱、つまり3分の1は PORQ>NO 解釈となっていた。これはなぜだろうか。例をいくつか見てみよう。

(34) 接続法, PORQ>NO?, 2001, Spain, Fiction

Regina trató de reanimarla asegurándole que su relación con ella no cambiaría en nada porque tuviera que regresar, por las tardes, a su casa con su marido.

(Regina tried to revive her by assuring her that her relationship with her would not change at all because she had to return, in the afternoons, to her house with her husband.)

(レヒーナは彼女に、彼女たちの関係は変わらない、なぜなら午後には家に帰らなければならないからと保証することによって元気づけようとした)

この例は、*porque* 節の意味内容のみからは解釈を特定することができないが、今回問題としている *porque* 節に対する主節が *no cambiaría en nada* と、否定の作用域を確定する役割を果たしている *nada* が生起していることから、否定の作用域は *porque* 節に及んでいない、PORQ>NO 解釈であることが判断できる。母語話者への聞き取りによれば、この例は文脈から見て明らかに PORQ>NO だが不自然さがあり *porque* 節の動詞の誤用ではないかとのことであった。

このような誤用と見られる例は1つだけだったが、その他の例はどうだろうか。

(35) 接続法, PORQ>NO, 2001, Colombia, Fiction

Aunque no fui a despedirlos porque me hubiera gustado largarme con ellos, tampoco me marché a casa.

(Although I didn't go to say goodbye to them because I would have liked to leave with them, I didn't go home either.)

(私は彼らと一緒に去りたかったので別れを言いに行かなかったのだが、私は家にも向かわなかった。)

この場合は、*no-porque* 構文が *aunque* で始まる従属節内に生起しているが、それに続く主節の内容 (否定表現 *tampoco* / *neither*) から PORQ>NO 解釈とわかる。

ではなぜここでは接続法 *hubiera* が使われているのだろうか。この場合、従属節である *porque* 節が否定の作用域に入っているからというよりも、意味的に独立した理由で接続法が表れている、つまり *porque* 節の中に「(可能なら) 一緒に去りたかった (実際は去れていない)」という、いわば命題内容の真が疑われている反現実的 (counter-factual) な内容が話者によってこめられているからと考えられる。よって、この例は単純に見れば、*porque* 節の中に接続法が使われているのに PORQ>NO 解釈になるケースであるが、否定の作用域に入ることと呼応して接続法になっているわけではないと考えることができ、本稿の調査の元となっている母語話者の観察と相反する例とはいえない。

同様の例として、次のケースを見てみよう。

(36) 接続法, PORQ>NO, (2001, Venezuela, Fiction0

No creo, *porque* sino en seguidita me hubiera gritado ¡Contimitad Cuquis!- y desechó el mal presentimiento adentrándose al cloacorranchó.

(I don't think so, because he would rather have yelled at me right away Cuquis! - and he dismissed the bad feeling by entering the sewer.)

私はそう思わない、なぜならむしろ彼はすぐに私に「かわいこちゃん続けて！」と怒鳴っただろうから。

Porque の直後に *sino* (むしろ) に続いて「～だっただろう」という仮定法の意味が続いており、これも、接続法が使われている理由は *no-porque* 構文の従属節 *porque* 節が否定の作用域に入ることと呼応しているからではなく、*porque* 節の内容そのものが非現実もしくは少なくとも話者がその命題の真を疑っていると言うことを伝える接続法の性質によるものであると考えられる。

Farkas (1997) の「法 (Mood) の意味論と語用論」における指摘によれば、接続法が独立して生起するときは、例えば命令、願望、家庭、疑い、驚きなど、話者による「確実性の欠如」が伝えられるという。前述の(29)は別構文扱いではあるが、接続法が独立して反現実を伝えるために使われている例である。NOT>BEC 解釈では話者は *because* 節の内容である命題の真にコミットしていない (もしくは不確実性を伝える) という一般的な説明を応用すれば、*porque* 節に接続

法が使われる（けれどもいつも使われなければならないわけでもない）⁹ということも説明できると考えられる。

以上のように、*no-porque* 構文の *porque* 節の動詞が接続法となるケースは、単純に従属節が否定の作用域に入ったことと呼応するものだけではなく、接続法そのものが使われる多様な状況を考慮して判断すべきであることがわかった。

4.3 主節と *porque* 節の間のコンマと非明示的韻律の役割

最後に、今回のコーパス調査で判明した興味深い事実について考察したい。それは、*porque* 節の直前にコンマが現れる例が少なからずあり、その数は297で全体の31.7%であったということである。その全ての例が、PORQ>NO 解釈の文であった。

(37) 直説法, PORQ>NO コンマあり

A Lucas no le gustó nada; *no* quería beber, *porque* entonces se dormiría, pero ...

(Lucas didn't like it at all; He didn't want to drink, because then he would fall asleep, but ...)

(ルーカスは全く気に入らなかった。彼は飲みたくなかった、なぜなら眠ってしまうだろうから、でも ...)

主節と *porque* 節の間にコンマがあることによって、*porque* 節の内容¹⁰「眠ってしまうだろうこと」が飲みたくなかった理由であることがはっきりとする。

このコンマ使用の例は興味深い。たとえばドイツ語のこの構文の文処理研究 (Hemforth and Konieczny, 2004) では、後の文脈を付け足した状態でオフラインでの意味的適切性の評価実験を行ったが、文脈がある状態でも (39) は (38) より難しいという結果になり、英語の BEC>NOT にあたる解釈の選好性を覆すことができなかった。

(38) [BEC>NOT, 後続文脈「仕事はつまらなかったが (やめなかった)」]

Die Sekretärin hat nicht gekündigt, weil sie ein hohes Gehalt erhielt, obwohl sie ihre Arbeit langweilig fand.

'The secretary did not quit her job, because she got a high salary, although she found her

9 Koizumi (2006)では *not-because* 文の語用論的機能について論じるなかで、解釈がどちらであっても *because* 節の命題内容が真であることは多くの例で強く含意 (*imply*) されているものの必ずしも要求 (*entail*) はされないと指摘している。下記のような NOT>BEC の例でも分かるように「ブラウスが似合っていた」ことは、必ずしも真である必要はない。話者もその真にはコミットしていないのである。

(i) Jane didn't purchase the white blouse because it suited her. She bought it because it was cheap. She didn't look all that good on it but she didn't care.

10 動詞 *dormiría* は「眠る (*dormir*)」の直説法可能未来形である。

work boring.’

- (39) [NOT>BEC, 後続文脈「仕事がつまらなかったのが退職した理由」]

Die Sekretärin hat nicht gekündigt, weil sie ein geringes Gehalt erhielt, sondern weil sie ihre Arbeit langweilig fand.

‘The secretary did not quit her job, because she got a low salary, but because she found her work boring.’

(Hemforth and Konieczny 2004)

英語やスペイン語とは異なり、ドイツ語では各節の後にコンマをおくことが書記上必須であり、コンマがあるからと言ってそこで解釈を「切る」とは限らない。しかし、そのことにもかかわらず文脈があっても NOT>BEC 解釈が困難であることは、やはりコンマに韻律的效果があり、*weil* (*because*) 節が理由の否定となる解釈を導くことが難しくなるからではないかという可能性がある。コンマを置くことで頭の中に投射される韻律が BEC>NOT 解釈のバイアスをもたらす考えが正しければ、Koizumi (2009)の2つ目の実験の結論が、この構文の処理においては文脈（語用論）的要因よりも韻律的要因の役割が大きいことを示唆するというものであることとも整合性が高い。また、Fodor (2002) の非明示的韻律仮説 (Implicit Prosody Hypothesis), つまり黙読の状況においても頭の中に韻律特性が投射され解釈に影響を及ぼすという主張をよく反映する例ともなるであろう。

V. ま と め

本稿では、英語の *not-because* 構文にあたるスペイン語の *no-porque* 構文についてコーパス調査を行い、解釈の分布と *porque* 節の動詞の法（直説法 vs. 接続法）の分布の関係性を検討した。2つのリサーチ・クエスチョンへの答えは以下の通りである。

RQ1への答え：コーパスから抽出した約1000例を分析したところ、PORQ>NO 解釈が98%以上にのぼる結果となり、Koizumi et al. (2019)の文完成課題の結果を再現した。よって、産出において、PORQ>NO 解釈が非常に一般的で、NO>PORQ 解釈の生起は比較的稀であることがわかった。

RQ2への答え：スペイン語に特徴的な *porque* 節内の動詞の法の区別（直説法 vs. 接続法）と作用域解釈の分布について、先行研究での母語話者の観察と併せて検討した結果、*porque* 節内の動詞が直説法の時には解釈がほぼ PORQ>NO となることがわかったものの接続法の際には NO>PORQ とならない場合もあり、単に接続法が使用されているからといってそれが必ずしも NO>PORQ 解釈になることを意味するとは限らないことが示唆された。文処理実験を構築する際には、接続法の幅広い使用と意味機能並びに *porque* 節内の命題の意味内容を注意深く考察し

た上で行うことが必要であることがわかった。

また、今回の調査で、コンマを伴う例がかなりあり、それらはすべて PORQ>NO 解釈と対応していることがわかった。このことは、英語と同じように韻律の影響が大きいと仮説を立てることが妥当ではないかということを示唆する。

今回の結果を踏まえて、韻律を手がかりとして解釈を自然なものにするという方略はスペイン語においても可能性として考えられることがわかった。今後、動詞の「法」の要因も利用しながら英語と同様の文処理実験を構築し、韻律や文脈の要因が文処理にどう関係しているかを実証的に検討することができそうである。接続法そのものの処理についての研究も極めて少ないため、今後の可能性ともなるだろう。

本稿の冒頭で述べたように、関係節の処理選好においてはスペイン語と英語は逆の傾向を示していた。しかし、この *no-porque* 作用域構文の処理実験でスペイン語でも英語と同様の結果を得ることができるとしたら、この2つの言語は処理傾向として当初考えられていたほど違いがないのではないかという示唆にも結びつくであろう。本稿での調査を足がかりとして、この興味深い疑問を解決するべくこの構文の処理プロセスを解明する実証研究を今後推進していきたい。

謝 辞

本稿はスペイン、バスク大学で開催された the XVI International Symposium of Psycholinguistics にて2023年6月2日に行ったポスター発表の内容に更なる検討・分析を加えたものである。参加者並びに査読者からの有益なコメントに感謝する。本研究は、科学研究費補助金（基盤C 課題番号 JP18K00566）の助成を受けた。

文 献

- Cuetos, F., & Mitchell, D. C. (1988). Cross-linguistic differences in parsing: Restrictions on the use of the Late Closure strategy in Spanish. *Cognition*, 30(1), 73-105. [https://doi.org/10.1016/0010-0277\(88\)90004-2](https://doi.org/10.1016/0010-0277(88)90004-2).
- Demestre J. (2021). Polarity subjunctives in Spanish: A self-paced reading study. Poster presented at the XV International Symposium of Psycholinguistics, Universidad Nebrija, Madrid, Spain.
- Farkas, D. (1992). On obviation. In I. Sag, & A. Szabolsci (eds.), *Lexical matters*, 85-109. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Faulkner, T. (2022). The two Spanish subjunctives: the required and default Subjunctives. *An International Journal of Hispanic Linguistics*. 11 (1), 70-100. DOI: 10.7557/1.11.1.6334
- Fodor, J.D. (2002). Prosodic disambiguation in silent reading. In *Proceedings of NELS 32*, 113-132.

- Frazier, L., & Clifton, C. Jr. (1996). *Construal*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hemforth, B. & Konieczny, L. (2004). Scopal ambiguity preferences in German negated clauses. Poster presented at the 26th Meeting of the Cognitive Science Society, Chicago IL.
- Hirschberg, J., & Avesani, C. (2000). Prosodic disambiguation in English and Italian. In A. Botinis (Ed.), *Intonation: Analysis, modelling and technology*, 87-95. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Jackendoff, R. (1972). *Semantic interpretation in generative grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Johnston, M. (1994). *The syntax and semantics of adverbial adjuncts*. Unpublished doctoral dissertation, University of California Santa Cruz.
- 喜多田敏高・シフエンテス カタリネ (2018). 「スペイン語における否定, 形容詞と連体修飾複文」『語学研究所論集』23, 89-107.
- Koizumi, Y. (2005). Pragmatics and prosody in processing ambiguous sentences: A Case study of the not-because ambiguity in English. *The World of Linguistic Research: A Festschrift for Kinsuke Hasegawa on the Occasion of His Seventieth Birthday*, 112-119. Tokyo: Kaitakusha.
- Koizumi, Y. (2009). *Processing the not-because ambiguity in English: the role of pragmatics and prosody*. Doctoral dissertation, City University of New York.
- Koizumi, Y., Demestre J., Fernández, Eva M., García-Albea, J., & Igoa, J. M. (2019). On the role of non-syntactic factors in processing the Spanish *no-porque* ambiguity: two elicited production studies. Poster presented at the XIV International Symposium of Psycholinguistics, Universitat Rovila i Virgili, Tarragona, Spain.
- Ladd, R. D. (1980). *The structure of intonational meaning*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- Portner, P. (1997). The semantics of mood, complementation, and conversational force. *Natural Language Semantics* 5, 167-212.
- Portner, P. (2018). *Mood*. Oxford: Oxford University Press.
- Real Academia Española: Banco de datos (CORPES XXI) [オンライン]. *Corpus del Español del Siglo XXI (CORPES)*. <<http://www.rae.es>> [最終閲覧日: 2023年11月15日]
- 田林洋一 (2007). 「スペイン語 EN 否定の極性条件とその言語環境について」『スペイン語学研究』22, 47-68.
- Terrell, T. & Hooper, J. (1974). A semantically based analysis of mood in Spanish, *Hispania*, 57 (3), 484-494.

A corpus investigation on the ‘no-porque’ sentences in Spanish: How the choice of verb mood corresponds with scope interpretation

Yukiko Koizumi

The present paper reports a corpus investigation designed to examine the distribution of the scope ambiguity involving negation and the adverbial *porque*-clause in Spanish. An important contribution of ‘non-structural’ factors (pragmatics and prosody) has been suggested for the processing of the English *not-because* ambiguity, as suggested in Koizumi’s (2009) self-paced reading experiment. The present project will look into the Spanish equivalent of this construction, where the choice of verb mood in the *porque*-clause seems to correspond with the scope interpretation. Out of the 936 sentences extracted from CORPES XXI, an overwhelming proportion of tokens (922, 98.5%) had a PORQ>NO reading and only 13 (1.4%) had a NO>PORQ reading, in line with Koizumi et al.’s (2019) production study. Out of the 919 indicative verb mood tokens, 916 had a PORQ>NO reading and 2 had a NO>PORQ reading, whereas out of the 17 subjunctive mood tokens 6 had a PORQ>NO and 11 had a NO>PORQ reading. This suggests that the correspondence between scope interpretation and the choice of verb mood may not be as clear cut as it initially appeared. Insights from the corpus examples are discussed, including how a comma appeared at the end of the main clause in many tokens and always resulted in the PORQ>NO interpretation. This may point to an important role of prosodic support in the resolution of this ambiguity in Spanish as well.